

# 中世イスラーム世界における論証が在る風景

—イブン・ムナッジム、クスター・イブン・ルーカー、  
フナイン・イブン・イスハーク間往復書簡を中心に—

三 村 太 郎

## 1 はじめに

ユークリッド『原論』などにおいて典型的に見られる「論証」という説明形態は、アリストテレス『分析論後書』で詳細に述べられていることから明らかなように、古代ギリシャにおいて大いに利用され、その後、さまざまな地域へと伝播し、展開していった。とはいえ、では、そういった論証が、当時、どういった場で、どういったかたちで発表されたのかといった、論証が在る風景は、判然としているとはいえない。

一方、アリストテレスの諸著作を全面的に受け入れた中世イスラーム世界においても、数学的諸学を中心として、論証という説明形態は、大いに用いられ、その結果、多くの論証が記録された。その際、紙という新たなメディアの普及によって、爆発的に文字資料が生産され、さらに、数多くの当時の文献が今日まで写され保存されることで、今まで見えてこなかった、論証を取り巻く状況というものが、垣間見られるようになった。

本稿では、特に、中世イスラーム世界において、論証が、どのような場で、どういったかたちで発表され、そして、それに対してどういった反論が、どういったかたちでなされたのかを見ていきたい。具体的には、イブン・ムナッジムとクスター・イブン・ルーカー、フナイン・イブン・イスハークとの間で交わされた、ムハンマドの預言者性にまつわる往復書簡を詳細に分析することで、以上に対する考察の手がかりを得ることにする<sup>1)</sup>。

## 2 往復書簡における登場人物

実際の考察へと進む前に、まず、往復書簡における登場人物について、概説しておこう。

そもそも、イブン・ムナッジムとクスター・イブン・ルーカー、フナイン・イブン・イスハークは、アッバース朝の宮廷で活躍した人物たちである。

イブン・ムナッジムについては、その生涯の詳細は明らかではないが、名前(ムナッジム=天文学者あるいは占星術師)から明らかのように、天文学や占星術で生活の糧を得ていたと思われるイスラーム教徒である。さらに、自身の書簡でも明言している通り、彼は、「ブルハーン (burhān 論証)」というあだ名を持っていたようで、このあだ名からも、自分自身のアイデンティティーが、論証の表明にあると自覚し、周りからもそう認められていたことが窺える。他方、クスター・イブン・ルーカー(盛年 860-900)とフナイン・イブン・イスハーク(808-873)は、ギリシャ哲学・科学文献のアラビア語翻訳で有名なキリスト教徒で、いわば、中世イスラーム世界に、論証科学を導入するのに最も貢献したといえる人たちである<sup>2)</sup>。

### 3 往復書簡の構成とイブン・ムナッジムによる論証の概要

さて、今回取り上げる往復書簡は、まず、イスラーム教徒であるイブン・ムナッジムが、ムハンマドの預言者性に関する論証を披露し、それに対して、キリスト教徒であるクスター・イブン・ルーカーとフナイン・イブン・イスハークが、それぞれ返答書簡を寄せるという形式を取っている。

しかしながら、イブン・ムナッジム自身は、まず最初に、フナイン・イブン・イスハークに宛てて書簡を書いたと推測される。このことは、イブン・ムナッジムの書簡の冒頭において、この書簡は、「フナイン・イブン・イスハークにもたらされ、おなじものがクスター・イブン・ルーカーにも〔もたらされた〕<sup>3)</sup> ([556. 3 - 9] ⇒ [1])」と注記されていることから、明らかである。実際、フナイン・イブン・イスハーク自身、その返信において、「その〔論証〕は私に対しての論証であると、あなたが考えているという話に、私は驚いた ([688.13] ⇒ [2])」と述べていることから、この推測は裏付けられる。

そして、「ムハンマドの預言者性」についての、イブン・ムナッジムの論証の筋道を概観してみるならば、以下ようになる。

- ムハンマドにまつわる話は確実である ([564-568])。
  - よって、ムハンマドがアラブの人々をそれにふさわしい状態へと導いたことも

確かである（〔568-572〕）。

- 一方、そういった導きの実行は、鮮やかな判断や、完全なる知性、卓越した知によってしか、行えない（〔572-574〕）。
- それゆえ、ムハンマドは、知性において、もっとも完全なる者である（〔574〕）。
- 一方、「もしあなたがたが、わがしもべ〔ムハンマド〕に下した啓示を疑うならば、それに類する1章〔スーラ〕でも作ってみなさい。もしあなたがたが正しいければ、アッラー以外のあなたがたの証人を呼んでみなさい」（『クルアーン』第2章21<sup>41</sup>）という一節に鑑みて、完全なる知性や健全なる本性を持った者は、もしも、自分以外に誰もそれに類するようなものを作ることができないということを確実に知っていない限り、人々に、このような挑発を行なうことはできない（〔574-576〕）。
- 一方、こういった確実な知識は、神しか知らせることができない（〔576-578〕）。
- よって、ムハンマドは、神に知らされたことになる（〔578〕）。
- ゆえに、ムハンマドは預言者である（〔578〕）。

以上のような筋道で、イブン・ムナヅムは、ムハンマドの預言者性を論証しようとした。その一方で、本往復書簡は、幸いにも、論証内容自身以外に、論証に付随した状況に関する記述が、多く見られる。すなわち、本往復書簡を精査することで、イブン・ムナヅムが、この論証をどのように提示し、それに対して残りの二人がどのように返答したのかという、いわゆる、論証を取り巻く状況が見えてくる。

そこで、以下、論証内容自身というよりも、それに付随した、論証を取り巻く状況に焦点を当てることで、本稿の主眼である、論証が在る風景を浮き彫りにしたい。

#### 4 論証を巡る議論の場の存在

前述の通り、この往復書簡の口火を切るのは、イブン・ムナヅムであった。そして、そのイブン・ムナヅムは、書簡を始めるにあたって、まず、以下のエピソードを紹介している。

私は、〔宰相〕アブー・ハサンの許にいた際、あなた〔＝フナイン・イブン・イスハーク〕から〔こう〕聞いた。〔すなわち、〕真実を明らかにしたという者が、実際はその〔真実〕には従っておらず、論証を立てたという者が、実際はその〔論証〕へと至っていない、とあなたは非難し、知恵の徒〔＝哲学者〕が、ある物事を台無しにしてしまっ、それに入れ込むことは、あなたによると、ふさわしくない、と。  
 ([556.11-14] ⇨ [3])

このエピソードから、当時、宰相の許で、論証の正誤について議論する場が存在していたことが窺われる。そして、そういった議論の場において、知恵の徒、すなわち哲学者たちが論証を提出しようとしていたこともほのめかされている。

一方、実際に、当時、議論の場が存在していたことは、さまざまな文献によって確かめられる。そういった場は、マジユリス（集会場）<sup>5)</sup>とよばれ、サロンともいえる場だった<sup>6)</sup>。具体的には、宮廷の一室や、高官の自宅といった場に、さまざまな知識人たちが集い、さまざまな話題について、議論を交わした。

本書簡において言及されているであろう議論の場も、「宰相の許で」とあることから、マジユリスに相当するものであったことは確かである。すなわち、そういったマジユリスにおいて、哲学者を中心に、論証を巡る議論が展開されていたといえよう。

そして、こういった議論の場に、イブン・ムナッジムも「ムハンマドの預言者性」という話題で、議論を持ちかけようとしたのだった。

そこで、イブン・ムナッジムが、フナイン・イブン・イスハークに、「ムハンマドの預言者性」の論証を巡る議論を、いかに持ちかけたのかを見てみよう。

## 5 論証を巡る議論への誘導

さて、イブン・ムナッジムは、自身の論証を、紙にしたためて持っていったのだが、そのことについて、フナイン・イブン・イスハークからは、以下のような反応を得ることになる。

一方、私〔＝イブン・ムナッジム〕が、あなた〔＝フナイン・イブン・イスハーク〕のために編んだ論証が完成したと、あなたに伝えたとき、「その〔論証〕に従うのは、骨が折れることであると、私は聞いた。この話で、私は、その〔論証

が] 長いので、それを読むことは、いらいらするだろうと思った」と、あなたが言ったのを、私は聞いた。 ([558. 6-8] ⇨ [4])

以上から、フナイン・イブン・イスハークは、イブン・ムナッジムの論証を読もうとしなかったことが分かる。すなわち、彼は、イブン・ムナッジムの設定した、論証を巡る議論の場へ、足を踏み込もうとしなかったのだった。

とはいえ、イブン・ムナッジムは、もちろん、満足しなかった。そのため、彼は、論証を書簡の形でフナイン・イブン・イスハークへ送ったといえる。いわば、書簡は、彼にとって、議論の場の延長であった。

そして、この書簡を出すことで、イブン・ムナッジムは、結果的にフナイン・イブン・イスハークからの返答を受け取ることになる。ここにおいて、イブン・ムナッジムは、フナイン・イブン・イスハークを、自身の議論の場へ誘導することに、成功したといえる。

では、なぜ、フナイン・イブン・イスハークは、一度拒否した議論の場への誘導を、結局は受け入れたのだろうか。やはり、その背景を探るには、論証という存在と、それをとりまく哲学者という存在へと、考察を及ぼさなければならない。

## 6 論証における合意という枠組み

そもそも、イブン・ムナッジムによると、自身の論証は、「すべての共同体の人々が合意し、本性によって把握されるような諸前提に、基づいている ([558. 2] ⇨ [5])」ものだという。

このような、合意という枠組みは、イブン・ムナッジムの論証のいたるところで見られる。実際、ムハンマドの話は確実であるという前提を示す際に、イブン・ムナッジムは、以下のような基礎付けを行なっている。

知恵のある者たちや、哲学者たちや、彼ら以外の全ての民族の者たちも、そういう話にうそはないことに合意している。そして、その同意は、根回しされたものではなく、その〔話を〕聞いたものは、その本性に刻み付けられる。

([564. 4-6] ⇨ [6])

そして、この合意こそが、論証の基盤であることは、イブン・ムナヅジムが、何度も、論証中で、合意の存在に言及していることから明らかである。

一方で、返答者であるフナインも、そのムハンマドの話の確実性を否定する際に、クルアーンが確実かどうか、私は知らないと発言することで、合意の存在への反例を提示しようとした（〔688.15-16〕）。また、クスター・イブン・ルーカーも、諸民族における事跡をさまざま紹介することで、こういった合意が、実際は存在しなかったことを、逆に論証しようとした（〔602-612〕）。こういった両者の返答態度からも、合意が論証の基盤であったことは、確かめられる。

実際、論証は、修辭法的説得、弁証法的説得と並んで、説得術の一つとして位置づけられてきた<sup>7)</sup>。そういった説得術としての論証という認識は、フナイン・イブン・イスハークの「ある人に対する論証とは、その人の同意によってしか、立てられない（〔688.14〕⇒〔7〕）」という一節からも窺える。それゆえ、論証の基礎として万人の合意を置くことで、説得術としての基礎を築こうとしたことは、容易に納得できる。

とはいえ、先の、「その同意は、根回しされたものではなく、その〔話を〕聞いたものは、その本性に刻み付けられる」というイブン・ムナヅジムの注記から、論証における同意が、他の説得術とは全く異なるものであることを強調しようという彼の意図が読み取れる。

## 7 論証における知性の役割

ここで触れられている「本性 (fiṭra)」とは、知性とのつながりで、しばしば言及される。例えば、ファーラービー（870頃-950頃）は、その『知性に関する書簡』において、アリストテレスの『分析論後書』における知性に言及しており、その際、「この能力〔=知性〕によって、人間には、推論や熟慮からではなく、本性 (fiṭra) や自然 (tab') から普遍的な前提に対する確信が生じる (Fārābī [1983] 8⇒〔8〕)<sup>8)</sup>と、本性 (fiṭra) との関連で、アリストテレスの知性論を紹介している。また、イブン・シーナー（980-1037）も、その『定義の書』において、「人間における健全なる第一の本性 (fiṭra) が、知性といわれる (Goichon [1938] 274⇒〔9〕）」と、本性の最高形態としての知性に触れている。そして、イブン・ムナヅジムにおいても、こういった合意や本性に基づいたものをうそ呼ばわりする者は「知性的なものから外れている（〔558.4〕⇒〔10〕）」と断言していることから、論証における合

意が知性的なものであるという認識が存在していたことは確かである。すなわち、論証における前提とは、人々の本性へと働きかけ、その結果、知性的な判断を通じて同意を得るものだったといえよう。

よって、そういった知性的な判断こそが、論証を理解する際に、重要な役割を果たしたことは、想像に難くない。そして、その際、判断者が持つべき特性とは、クスター・イブン・ルーカーの言葉で言えば、「中立さと公正さ（[682.5] ⇒ [11]）」であり、フナイン・イブン・イスハークの言葉で言えば、「心（＝知性<sup>9)</sup>）と公正さを持ち、何の細工も偏りもない（[690.10-11] ⇒ [12]）」ことなのである。まさに、こういった特性を持つ者の判断こそが、「根回しでない」本性での合意だといえよう。

さらに、イブン・ムナッジムは、判断者が持つべき特性について、以下のように、より詳細に書き残している。

思索する者が思索を用い、考察する者が考察を用いるのは、[以下のような状態でしかない。すなわち、] その心を誤りから救済し、欲望から純化し、一般的な慣習から自由にし、その求めるところへと向かい、公平と均衡を目指し、あらゆる物事に正当さを求め、自らを救いへと導くようなものを自ら獲得し、誤った道へと導いたり、その〔誤った道〕とよい選択との間を塞ぐようなものどもからその心を制御することである。そして、こういった状態において、論証は明らかになる。 ([560.4-10] ⇒ [13])

このように、論証の正確さを判断するためには、以上のような態度を必要としたのだった。やはり、一般的な慣習や根回しといった、いわゆるこの世的なしがらみの強固な時代において、そういった制限から脱却し、公正中立を保つには、イブン・ムナッジムの言うような、数多くの制御が必要であろう。そして、そういった困難を乗り越えたところに、論証の正確さの判断を成立させる公正中立な判断が存在したのだった。まさに、その人の生き方自身が、論証の正確さの判断を裏付けると言ってよいのではないだろうか。

このように、判断者の生き方自身に裏付けられた公正中立さに基づくからこそ、論証による説得は、他の説得とは全く違う次元にあると、イブン・ムナッジムは、強調したかったのだろう。すなわち、或る人がそういった論証による説得を受け入れられ

るということは、同時に、その受け入れた人自身の公正中立さをも示すことになるのである。

そして、こういった、論証における判断の特別性については、クスター・イブン・ルーカーも認識しており、「法官や敵対者がするようにではなく（〔682.5-6〕⇒〔14〕）」公正で中立に、自分自身で判断しなければならない、と書き残している。一方、こういった中立さや公正さは、フナイン・イブン・イスハークにおいても強調される点であった。

## 8 公正中立に判断するという事

フナイン・イブン・イスハークは、その返答において、真の宗教的な教説と偽の宗教的な教説との見分け方について触れている。彼によれば、両者を見分けるには、その見解をいかに受け入れたのかを検討すればよいとして、真偽の条件を、以下のように列挙している（〔690.18-692.21〕）。すなわち、その教説を受け入れた理由が、意思に反するものであったり、自身がとても不幸な状況にある場合であったり、権力者に取り入るためであったり、言葉に溺れてしまったためであったり、ある人とのつながりの強さだったりした場合は、その教説は偽だという。一方、徴を見たり、同意すべき論証があったりした場合は、その教説は真だという。ここにおいても、真であるには、この世的なしがらみから脱却していることが重要であり、その根拠として、論証の有無を持ち出していることも興味深い。

そうして、キリスト教が真である理由として、フナイン・イブン・イスハークは、以下の諸点をあげている（〔696.5-698.8〕）。すなわち、それを受け入れたのが権力者の強制によるのではなく、また、それを受け入れた者たちが、論理学に通じている、いわゆる哲学者であり、さらに、友人や兄弟の勧めで受け入れたのではないからだという。

以上から、フナイン・イブン・イスハークが、キリスト教が真であることを裏付けるものとしても、この世的なしがらみから脱却した、知性的な判断の有無を持ち出していることが分かる。すなわち、知性的な判断を維持する生き方こそが、全ての真理の根源だったともいえよう。やはり、論理整合性を基盤とした公正中立な判断を行なうことのできるような、いうなれば哲学者として生きることこそが、真理を導出するための手段であり、かつその根拠となっていたのである。

ここにおいて、フナイン・イブン・イスハークは、キリスト教徒であるという自覚と同時に、哲学者であるという自覚を持っていたことになる。両者の自覚は、彼にとって、この世的なしがらみから脱却し、公正中立な判断を行なうことができるという点で、通じるものであった。そして、彼のこの自覚は、本稿の冒頭で紹介した「〔真理を台無しにすることは〕知恵の徒にとってふさわしくない」という彼の発言にもほのめかされている。すなわち、この発言は、哲学者としての自身への戒めとも取れるからである。

そのうえ、こういった自覚があったからこそ、フナイン・イブン・イスハークは、一度拒否した、論証を巡る議論の場へと、やはり誘い込まれていったともいえる。では、イブン・ムナヅジムは、フナイン・イブン・イスハークに対して、こういった言葉を投げかけたのだろうか。

## 9 哲学者として生きる者たち

前述の通り、イブン・ムナヅジムは、フナイン・イブン・イスハークに、論証を読むことを拒否されたわけだが、それに対して、イブン・ムナヅジムは、「知性ある者は、あなたにおいて、こういった〔発言〕を、認めることはできない（〔558.9〕⇒〔15〕）」と、非難している。その上で、イブン・ムナヅジムは、以下のように、フナイン・イブン・イスハークのことを評している。

あなたは、真理を知った後で、その〔真理〕に反抗することが可能である、とは考えない人である。なぜなら、神があなたにアダブ〔=教養〕における幸福を与えたからである。そして、あなたは、自分の宗教セクトにおける権威ゆえに、真理に従うことをやめるような人ではなく、一般的な慣習をより好むような人でもなく、よりふさわしい真理に基づくのである。（〔558.19-559.3〕⇒〔16〕）

この発言において、イブン・ムナヅジムは、フナイン・イブン・イスハークならば知性的で公正中立な判断を行なうはずだ、と念を押していることが分かる。いわば、イブン・ムナヅジムにとって、フナイン・イブン・イスハークは、自分と同じ哲学者として生きてきたはずで、それゆえ、論証として提出されたものを無視することはできないと、イブン・ムナヅジムは語りかけているように思える。

こういった確認をほどこすことで、イブン・ムナヅジムは、フナイン・イブン・イスハークに対して、その哲学者としての生き方を、今一度思い起こさせようとしているのではないか。そして、呼び起こさせた後で、イブン・ムナヅジムは、フナイン・イブン・イスハークに対し、論証を受け入れないならば返答を書きよこしてくれと嘆願する。結局、この呼びかけに答える形で、フナイン・イブン・イスハークは返答をよせることになり、イブン・ムナヅジムの誘導は、成功を取めたのだった。

以上の、イブン・ムナヅジムによる誘導とその成功を眺めることで、当時の、哲学者として生きることに自覚の強さと、同じ生き方を選択した者であるというつながりの強さを見ることができた。そして、こういった自覚とつながりの強さは、クスター・イブン・ルーカーの、「私を除く、私と同じようなあなたの友たちや同胞たちは、あなたに返答していると、あなたは私に語った（[594.15-16] ⇒ [17]）」という証言からも窺える。すなわち、こういったイブン・ムナヅジムによる呼びかけが効力を持っていたことは、クスター・イブン・ルーカーを含む、多くの友たちがそれに返答せざるを得なかったという状況からも裏付けられよう。やはり、それだけ、哲学者として生きる者たちの自覚とつながりは強かったといえる。

その背景には、論証をめぐる判断の基礎となる公正中立さが存在することは明確だろう。まず、論証を提示する者が、その内容を判断する者に対して公正中立を要求する。それに対して、判断者は、公正中立な判断を行なうことで、論証提示者が公正中立な判断を行なってきたかどうかを精査することになる。すなわち、論証を巡る議論の場とは、こういった公正中立な判断を保有している者たちの場であったといえるだろう。それゆえ、こういった論証を巡る議論の場へと参入することが、哲学者として生きている証だったのではないだろうか。

さらに、同じ生き方を選択するもの同士であるという意識の強さは、イブン・ムナヅジムによる論証の位置づけにも現れている。すなわち、イブン・ムナヅジムにとって「あなたは友であり、私は、あなたへの助言として、（[560.13] ⇒ [18]）」自身の論証を編んだのだという。ここにおいて、論証が「友への助言」として提示されていることは明らかだろう。

そのうえ、こういった「友への助言」という枠組みは、返答者にも継承されている。具体的に言えば、返答者は、「敵対者ならば、あなたの論証のこの欠陥を指摘するだろう」という形の助言（[660.14]、[668.21] など）として、先の論証を否定する書

簡を編んだのだという。以上から、あくまで論証提唱者と返答者との間は、「友」という関係に結ばれており、両者の間の議論は、決して相手を完全否定するものではなかったことが分かる。

いふなれば、哲学者であるという同じ生き方を選択していたからこそ、彼らは「友」であり、友だからこそ、あなたのために論証を編み、あなたのために、論証の欠点を指摘する、という構図が成立していたのだ。その背景には、哲学者として生きることへの自覚の強さがあったことは、いうまでもない。一方で、この構図が強固だったがゆえに、フナイン・イブン・イスハークは、結局、議論の場へと足を踏み込んだと結論できるのではないだろうか。

## 10 おわりに

以上の分析から、中世イスラーム世界における論証が在る風景が、少し見えてきたかもしれない。

まず、論証にまつわる判断には、公正中立さが要求された。そして、この公正中立さを維持するために、さまざまな制限が要求された。このような、さまざまな制限を踏まえて生きていくことこそ、哲学者として生きることと相当した。逆に、哲学者として生きているからこそ、その判断の公正中立さが維持されたともいえよう。

さらには、こうした哲学者として生きるという自覚が、さまざまな制限を越えて形成されるゆえに、強固なものとなっていった。それに伴い、同じように哲学者として生きる者たちの間に強いつながりが生じ、結果として、哲学者間に「友である」という関係が成立した。

それゆえ、論証を巡る議論の場は、哲学者という友たちによって占められることになる。いわば、論証を巡る議論に呼応した時点で、その人物は哲学者であり、友であることになる。すなわち、論証を巡る議論に参入することは、哲学者として生きている証であったともいえる。

論証が在る風景とは、まさに、哲学者が生きる風景だったのではないだろうか。

(本稿の元となった発表後、さまざまな方々から有益なコメントをいただいた。中でも、堀江聡氏(慶応大学)と荻原理氏(東北大学)と高橋英海氏(中央大学)から、本稿の作成において重要な指針となるような、たいへん詳細なコメントをいただいた。

ここに記して感謝の意を表したい。なお、本報告は、平成16年度の文部科学省科学研究費補助（特別研究員奨励費：「アラビア語写本の校訂を通じた、中世イスラームにおける天文観測器具に関する歴史研究」）の研究成果の一部である。）

### 注

- 1) 今回、往復書簡のテキストとして、Samir & Nwiyā ed., *Une correspondance islamo-chrétienne entre Ibn al-Munāẓẓīm, Ḥunayn ibn Ishāq et Qusṭā ibn Lūqā*, Turnhout, Belgique: Brepols, 1982 を用いた。ただし、このテキストは、判読の困難なペイルート写本しか参照することができなかったようで、かなりの語句に訂正を加えている。とはいえ、写本の元の読みを念頭に置きながら解説を進めていく過程で、必ずしも訂正する必要のない箇所も、いくつか見られた。そこで、今回、できる限り写本の読みに従うことを目指し、付録に示す引用原文の異読欄（各引用句の末尾）において、Bでペイルート写本の読みを、Pで校訂者によって訂正された読みを示した。記号のない読みは、本稿の筆者によって訂正の施された読みである。なお、この往復書簡については、最近、今回用いたテキストの編集者の一人である Samir によって、イタリア語訳を付した新たなテキスト Samir et al., *Una corrispondenza islamo-cristiana sull'origine divina dell'islam*, Torino, 2003 が出版されたようだが、未見である。
- 2) イブン・ムナヅムに関しては、往復書簡のテキストに付せられた序文 (p.538-543) を、クスター・イブン・ルーカーとフナイン・イブン・イスハークに関しては、Gillispie [1970/80] の当該箇所を参照。なお、本稿において、往復書簡については、参照箇所を「[往復書簡テキストの頁数.行数]」で示す。そして、続いて、「⇒ [資料番号]」で、引用箇所に対応する付録における資料番号を示し、付録に、引用原文と異読採用等の文献学的な注記を掲載する。その他の参考文献に関しては、「著者名 [発行年] 頁数」で示し、その文献情報の詳細は、最後にまとめて示す。
- 3) 引用文中の〔 〕内は、引用者による追加的説明である。
- 4) ただし、この章句番号は、フリューゲルス版における番号である。カイロ版においては、第2章23に相当する。
- 5) マジュリス majlis は、語根 j-l-s「座る」に由来し、文法的にはその語根の場所を示す名詞 (nomina loci) に分類される。すなわち、この場合は、「座る場所」を意味する。
- 6) マジュリスの実際については、Kraemer [1986]、Kraemer [1992] 参照。また、マジュリスにおいて、キリスト教徒とイスラーム教徒が討論した例も、幾つか伝わっている。詳しくは、Griffith [1992] 参照。そして、こういったマジュリスにおいて、キリスト教徒とイスラーム教徒が討論する際、『クルアーン』（第2章111など）でユダヤ教徒とキリスト教徒に対していわれる「汝らが真実を語っているのなら、証拠（プルハ

ーン) を出せ」という一節を意識していることは確かである。しかしながら、今回扱う議論においては、その議題となっているムナツジムのブルハーンが、論証として扱われていることは、その議論の流れから明らかである。(具体的にいえば、『分析論後書』への言及などが挙げられよう。) なお、キリスト教徒とイスラーム教徒が討論する際のブルハーンの占める役割については、Griffith [1983] 参照。

- 7) こういった位置づけは、例えば、イブン・ルシュド『法と哲学の連続性についての決定的な書』(Averroës [2001] p. 8 を参照) に展開されている。
- 8) なお、『知性に関する書簡』の日本語訳(竹下 [2000] p. 177) も参照。
- 9) ここでの心 *lubb* とは、知性のことを指すと思われる。Lane の亜英辞典の当該箇所、および Goichon [1938] pp. 398-400 参照。

### 参考文献

- Averroës [2001] Averroës. *The Book of the Decisive Treatise Determined the Connection between the Law and Wisdom*. text with tr. by Charles E. Butterworth. Brigham Young University Press.
- Fārābī [1983] Al-Fārābī. *Risāla fī al-'Aql*. ed. by Bouyges, M. Beirut, 1983.
- Gillispie [1970/80] Gillispie, C. C. ed. *Dictionary of Scientific Biography*. 16 vols. New York: Charles Scribner's Sons.
- Goichon [1938] Goichon, A. -M. *Lexique de la langue philosophique d'Ibn Sinā (Avicenne)*. Paris: Desclée de Brouwer. Reprint, Frankfurt am Main: Institute for the History of Arabic-Islamic Science at the Johann Wolfgang Goethe University, 1999.
- Griffith [1983] Griffith, S. H. "The Prophet Muḥammad, his Scripture and his Message according to the Christian Apologies in Arabic and Syriac from the First Addasid Century." in Fahd, T. ed. *La vie du prophète mahomet; colloque de Strasbourg - 1980*, Paris, 1983, pp. 99-146.
- Griffith [1992] Griffith, S. H. "Disputes with Muslims in Syriac Christian Texts: from Patriarch John (d. 648) to Bar Hebraeus (d. 1286)," in Niewohner, F. ed. *Religionsgespräche im Mittelalter*. Wiesbaden: Wolfenbütteler Mittelalter-Studien, 4, 1992.
- Kraemer [1986] Kraemer, J. L. *Philosophy in the renaissance of Islam: Abu Sulayman Al-Sijistani and his circle*. Leiden: E. J. Brill.
- Kraemer [1992] Kraemer, J. L. *Humanism in the renaissance of Islam: the cultural revival during the Buyid age*. 2nd rev. ed. Leiden: E. J. Brill.
- 竹下 [2000] 竹下政孝編『イスラーム哲学』中世思想原典集成 11, 平凡社, 2000.

## 付録——引用原文

[1] وانفذها الى ابي زيد<sup>ه</sup> حنين بن اسحاق ومثلها الى قسطا<sup>ب</sup> بن لوقا

B الحززيل [P] زيد<sup>ه</sup>

B قسط [P] قسطا<sup>ب</sup>

[2] وعجبت ايضا من القول الذي زعمت انه برهان علي

[3] وقد سمعتك في اليوم الذي كنت عند ابي الحسن تدمّ وتلوم من يتبين له الحق فلا يتبعه ومن يقام البرهان الواضح فلا ينقاد اليه وليس يحسن عندك<sup>ه</sup> من كان من اهل الحكمة ان يعيب شيئاً ثمّ يدخل فيه

P عند [B] عندك<sup>ه</sup>

[4] وقد سمعتك انا اخبرتك اتي فرغت من البرهان الذي نطمته لك بنفسي<sup>ه</sup> تقول بلغني ان في طاعته<sup>ب</sup> نصبا وذمبت في هذا القول الى ان هذا مما يضجر<sup>ج</sup> قراءه لطوله

B على نفسي [P] بنفسي<sup>ه</sup>

P مطالعته [B] طاعته<sup>ب</sup>

P تضجر [B] يضجرو [B] يضجر<sup>ج</sup>

[5] مقدماته مما عليه الامم كلها مجمعة<sup>ه</sup> وما هو مأخوذ من الفطرة

B مجمعة [P] مجمعة<sup>ه</sup>

[6] وقد اجمعت<sup>ه</sup> الحكماء وفلاسفة وغيرهم من الامم كلها على ان من الاخبار ما يمنع<sup>ب</sup> في مثلها الكذب ولا يتهماً فيها الاتفاق ويكون سامعها مضراً<sup>ه</sup> في فطرته

B اجتمعت [P] اجمعت<sup>ه</sup>

P يمنع [B] يمنع<sup>ب</sup>

B يتهي [P] يتهياً<sup>c</sup>

P مصرًا [B] مضراً<sup>d</sup>

[7] البرهان لا يقام على احد الا من اقراره

[8] قوّة النفس التي بها يحصل للانسان اليقين بالمقدمات الكلية الصادقة  
الضرورية لا عن قياس اصلا ولا عن فكر بل بالفطرة والطبع

[9] فيقال عقل لصحة الفطرة الاولى في الانسان

[10] خرج عن العقول

[11] انصاف وعدل

[12] ذو اللب والعدل من غير تحايل ولا ميل

[13] ولا ينتفع ناظر بنظر ولا مفكر بفكر الا مع سلامة قلبه من الزيغ  
وطهارته من الهوي وبراءته من الالف والعادة التي جرى عليها والقصد  
بارادته ونيتته الى العدل والصفة واعطاءه كل امر من الاروم قسطه واخذ<sup>e</sup>  
بنفسه<sup>b</sup> مما<sup>c</sup> يؤديه الى النجاة وحراسته قلبه من الاروم المؤذية الى الضلال  
والحائلة بينه وبين حسن الاصطفاء واصابة<sup>d</sup> الاخبار فبمثل هذه الشروط  
يتبين البرهان

P اخذه [B] اخذ<sup>e</sup>

P نفسه [B] بنفسه<sup>b</sup>

P ما [B] مما<sup>c</sup>

B احاية [P] اصابة<sup>d</sup>

[14] لا تكن كالقاضي الذي هو قاض<sup>e</sup> وخصم

B قاضي [P] قاض<sup>e</sup>

[15] لا يقبله منك عاقل

[16] انت بمحمد آله ونعمته ممن لا يطنّ انّ المعاندة للحقّ بعد المعرفة

مكنة لما وهبه آله لك من الحظ في الادب ولست بحمد آله ممن يتمتع من  
الانقياد للحق<sup>ه</sup> للرئاسة التي له في اهل ملته ولا من<sup>ب</sup> يؤثر الالف العادة التي  
جرى عليها على الحق الذي هو اولى به

B للحق من [P للحق<sup>ه</sup>  
P ممن [B من<sup>ب</sup>

[17] حكيته من اجابة غيري<sup>ه</sup> اياكا عنه منما يجري مجراي<sup>ب</sup> من اصدياقك  
واصحابك

B غير [P غيري<sup>ه</sup>  
P مجراك [B مجراي<sup>ب</sup>

[18] انت صديق وقد كتبت كتابي هذا نصيحة لك